

「細胞の話」

2024・1・24 重枝 一郎

費用対効果という話がよく財政を預かるところから言われる。そして、その根拠を求められ、数値化して示すよう言われる。しかし、学校教育においては数値化できるものとできないものがあることは誰もが知るところである。それは、「学力テストのスコア」「進路実績」などのように数値化できる『認知能力』と、数値化できない『非認知能力』である。私たち教師は毎日の地道な教育活動において莫大なエネルギーを費やしているのは『非認知能力』の育成になる。

『非認知能力』をわかりやすく表現すると「自分を律する力」「やり抜く力」「助けてもらう力」「教わる力」「聴く力」「リスペクトする力」「共感する力」「忍耐強さ」などであり、社会で生きていくための『生きる力』の素地になる。この『非認知能力』と基本的な生活習慣が、働く際の生産性に良い影響を与えていると言われる。

この中の「忍耐強さ」については、よく勘違いされていることが多い。「忍耐強さ」は、厳しくすることで育まれると想像する人が多い。でも、それは違う。確かにそういう状況で育まれる部分はあるのかもしれない。でも、自分自身を振り返ってみると、たったひとりで歯を食いしばってがんばり抜いて何かを達成したりはしていない。誰かが苦しいときに話を聞いてくれたり、相談ののってくれたりしている。励ましなどの言葉もそうだが、隣にいる人の微笑みでも忍耐は継続される。つまり、「忍耐強さ」の要因は、個人のパーソナリティーの部分より、その人の周りの人的なものを含む環境が大きいと言えるのである（研究では9%が個人のパーソナリティーで、残りの91%が周りの人的環境と言われる）。だから、この「忍耐強さ」を継続させるのは、その人の周りにいる人たちのかわり方や思いやりになる。学校や学級、チームの雰囲気、一人一人の忍耐強さを生み、それが教育力となり、結果につながる。この話は、先日、高3の「校長特別授業」で話した。その際、内容に関連するグループワークも行った。

人は、周りの人に支えられながら一歩ずつ成長するものである。つまり、人と人との間に価値が生まれ、成長し、自信をつけ、社会で活躍する道筋をつかむという成長物語になっていく。

組織論の例え話で『細胞の話』を紹介する。これは、一昨年の「Sense of Mission 7月号」で書いた文章である。「カマス理論（131号）」と合わせて、校内人事の時期に読んでみてほしい。

『生物としての私たちの個体ができあがるには、他の細胞との関係が重要な役割を果たしているというのです。受精卵は2つ、4つ、8つとどんどん細胞分裂していきますが、当初、細胞には分担が決まっていません。細胞が心臓になる、脳になる、筋肉になる、骨になるという分化は、最初から全部遺伝子にプログラムされているわけではないそうです。では、どうやって細胞は役割分担をしているのでしょうか。実は、胚という細胞の塊の中で、細胞と細胞が、互いに物質やエネルギーを交換し、情報交換をして自分の役割を決めているそうです。どんなものにもなれる可能性をもっているけれど、まわりとの関係や相互作用がないと細胞は自分が何になるか決められないそうです。細胞は単体では生きられないのです。細胞が周りとの関係の中で自分の役割を決めて、その結果、私たち個体はできあがるのです。そう考えると、私たち個体もまた細胞と同じではないのでしょうか。人もまた一人では生きていけません。人もまた、他者との関係の中で、自分の役目が決まっていくのです』